

『裏切られた救い主』

'21/09/12

聖書箇所: マルコの福音書 14 章 12-21 節 (新約 p.96-)

皆さんは「裏切り」と聞いて、どんなことをイメージされますか? …例えば、1番、私たちの身近に起こり得る事例としては、「夫婦間の裏切り」…、つまり、浮気や不倫といったことでしょうか? …悲しいことに、浮気や不倫といったようなことは、その配偶者の愛を大きく裏切る行為であって、その人が捧げてきた愛が深ければ深いほど…、あるいは、その人に対する信頼や愛が大きければ大きいほど、その裏切りという罪は重く…、そのダメージは計り知れないと思われまます。

命題: 救い主であるイエス様は、どのように十字架へ向かっていかれたか?

今日、私たちが学んでいるみことばには、そういったような…、「大きな裏切り」が起こっております。今日のみことばが私たちに教えてくれているのは、約束の救い主として、この地上へ来てくださったイエス様が、あの十字架を前にして、どのような行動を取っていかれたのか? ということでもあります。

恐らく…、ま、先週もそうでしたが、これからしばらく、メッセージのテーマとしては、似たような内容が続いていくと思われまます。そういったこともあって、礼拝の賛美も、ま、今は自動演奏機を使っているということもあるのですが、今日の賛美は、先週と同じ選曲になっております。

そういった中で、私が願いますのは、今日このメッセージを聞いてくださった皆さんが、ますます、明確にイエス様の正体について、はっきりと知ることができ…、それと同時に、私たちの罪や弱さについて、自覚することができるよう願います。そして、私も…、また、皆さんも、ますます、このイエス様にすがり、このイエス様と共に残りの人生を歩んでいけるよう願います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばであるマルコ 14:12-21 の部分をお開きください。

I・過越の準備をされた!(12-16節)

どうぞ、まずは、今日のみことばの内、12-16 節の部分に注目していきましょう。ここで、イエス様は、**過越の準備をされた!**ということが分かります。…でも、そういったことで何が分かり…、また、こういったことを私たちは学んでいくべきなのでしょう? 12-16 節には、このように記されてあります。

12 種なしパンの祝いの第一日、すなわち、過越の小羊をほふる日に、弟子たちはイエスに言った。「過越の食事をなさるのに、私たちは、どこへ行って用意をしましょうか。」

13 そこで、イエスは、弟子のうちふたりを送って、こう言われた。「都に入りなさい。そうすれば、水がめを運んでいる男に会うから、その人について行きなさい。」

14 そして、その人が入って行く家の主人に、『弟子たちといっしょに過越の食事をする、わたしの客間はどこか、と先生が言っておられる』と言いなさい。

15 するとその主人が自分で、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれます。そこでわたしたちのために用意をなさい。」

16 弟子たちが出かけ行って、都に入ると、まさしくイエスの言われたとおりであった。それで、彼らはそこで過越の食事をした。

●イエス様の正体と、神のご計画!

どうぞ、まずは、今読んだ 12 節に注目してみてください。…この日は、『種なしパンの祝いの第一日、すなわち、過越の小羊をほふる日…』とありますので、今の感覚で言えば、木曜日となります。この日の夜…、この後見ていく「最後の晩餐」が行なわれ…、そして、ゲツセマネの園での出来事、イエス様の

裁判へと続いていくわけです。…そういった中で、今日のみことばに出てくる…、過越の準備になるわけですが、実は、このみことばを通して、私たちは、もう1度、このイエス様の“正体”と、そのイエス様を通してなされる、神様の“御計画”について学んでいくことができるのです。

どうぞ、皆さん、イメージしてみてください…。この時、エルサレムでは、ユダヤの三大祭りの1つである、過越の祭りの初日であつたわけで、そのエルサレムには、大勢のユダヤ人たちが集まっていたはずですが、そんなタイミングで、弟子たちが心配していたのは、「まだ、過越の食事の準備ができていない!」ということでありました。だから、彼ら弟子たちは、イエス様に言うわけです。「12 節の後半、『過越の食事をなさるのに、私たちは、どこへ行って用意をしましょうか?』って…。」

こういった言葉を聞いて…、現代のここ日本に住んでいる私たちからすると、この質問の重要性に、多くの人は気付けないかも知れまます。…だって、私たちは、つい思ってしまうませんか? …弟子たちの質問は、「過越の食事は、どこにしましょうか? マクドナルドにしましょうか? それとも、吉野家で済ませましようか?」…そんな感じだったのかな? って…。

もちろん、私たちのそういったような感覚は、“全くの見当外れ”であります。…どうぞ、ここで、少し前のメッセージでも引用した、出エジプト記のみことばを紹介させていただきます。少し長いのですが、ちょっと我慢をしてお聞きください。出エジプト記 12:1-12 に、こう記されてあります。『1【主】は、エジプトの国でモーセとアロンに仰せられた。2「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。3 イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意しなさい。4 もし家族が羊一頭の分より少ないなら、その人はその家のすぐ隣の人と、人数に応じて一頭を取り、めいめいが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。5 あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。6 あなたがたはこの月の十四日までそれをよく見守る。そしてイスラエルの民の全集会は集まって、夕暮れにそれをほふり、7 その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かまいにそれをつける。8 その夜、その肉を食べる。すなわち、それを火に焼いて、種を入れないパンと苦菜を添えて食べなければならない。9 それを、生のままで、または、水で煮て食べてはならない。その頭も足も内臓も火で焼かなければならない。10 それを朝まで残してはならない。朝まで残ったものは、火で焼かなければならない。11 あなたがたは、このようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を引き締め、足に、くつをはき、手に杖を持ち、急いで食べなさい。これは【主】への過越のいけにえである。12 その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下さう。わたしは【主】である。』と続いていきます。

⇒いかがでしょうか? …これは、天の神様がエジプトを脱出する前のモーセとアロンに語られた、神様からの言葉ですが、このイエス様の時代…、イスラエルの者たちは、この命令を、あのモーセの時代から、1400年以上経っても、まだ、忠実に守っていたのです。…、いえ、この時代だけではありません。それから、3400年以上経った現代でも、みことばに厳格な者たちは、この過越の食事を、できるだけ、忠実に守ろうとしているのです。

つまり、過越の食事とは、彼らユダヤ人たちにとって特別なものでありまして…、それは、神様からの命令であり…、言わば、一種の儀式のようなものなので、簡単に済ませ…、適当に済ませる、というわけにはいかなかったのです。さあ、それでは、今日のみことばの 13 節以降を見ていきましょう。

ここで、イエス様は、12 弟子たちから 2 人を選んで、使いに使われます。今日のみことばの平行記事であるルカ伝 22 章を見てみると、その弟子たちがペテロとヨハネであつたことが分かります。…さて、イエス

様は、その2人を遣わずに当たって、『都に入りなさい。そうすれば、水がめを運んでいる男に会うから、その人について行きなさい。』ということをお教えます。…でも、皆さん、考えてみてください。…この時、エルサレムでは過越の祭りのため…しかも、その大勢がその準備などで追われていたわけで、その中に、『水がめを運んでいる』人なんて、どれほど居たでしょう？…恐らく、複数居たはずで、だからこそ、イエス様は、こうおっしゃいました、『水がめを運んでいる男に会うから、その人について行きなさい。』って…。実は、この当時、水を用意したり、水がめを運んだりする作業は女性の役目でありました。だから、水がめを運んでいる“男性”は珍しかったはずで…、それが目印になったと思われま。

しかも、14 節以降で、イエス様は、こうおっしゃいます、『14 そして、その人が入って行く家の主人に、『弟子たちといっしょに過越の食事をする、わたしの客間はどこか、と先生が言っておられる』と言いなさい。15 するとその主人が自分で、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれます。そこでわたしたちのために用意をなさい。』って…。一体どうして、こんなことが…、しかも、そこまでの確に、イエス様は知っておられたのでしょうか？⇒もちろん、こんなことは偶然では説明がつかない…。簡単に言うと、イエス様が真の神様であられるからです。イエス様に、基本知らないことはありません。そうでしょ！

それに対して、私たち人間は皆、先のことが分かりません。…だから、私たちは神様のお言葉である聖書に耳を傾け…、そのみことばに従っていくべきなのです！…この神様は、すべてのことを御存知です。また、この神様は、私や皆さんのことを…、それこそ、御自分のひとり子でさえ、犠牲にしてくださるほど、愛してくださっています。そうでしょ！…なのに、どうして、私たちは、その神様のお言葉に従っていくことをためらうのでしょうか？

●「過越の食事」のメニュー！

どうぞ、今からは、この日この時に、イエス様と弟子たちが食べたはずの「過越の食事」の“メニュー”について簡単に説明させていただきます。…実は、私も、今から 20 年以上前、その時の教会メンバーと一緒にイスラエルに行った時、過越の時に、イスラエルで伝統的に食べられているメニューを食べさせてもらったことがあります。…と言っても、もうかなり前なので、あまり詳しくは覚えておりません。しかし、その方向性と言うか…、コンセプトはしっかり覚えています。

その前に、皆さん、日本のおせち料理のメニューをご存知ですか？…と言っても、最近では、いろんな料理屋がオリジナルのおせち料理を販売しているので、種類は様々ですが、私が今言いたいのは、伝統的なおせち料理のメニューです。…例えば、エビ。エビは、あの腰が曲がっているような形から、長寿つまり、長生きを願うことだと聞いています。それ以外にも、数の子。数の子は、たくさんの卵で構成されていることから、子孫繁栄を願うことだそうです。あと、栗きんとん。あれは、調理した色が黄金色の財宝に見えることから、経済的な繁栄を表わしているのだそうです。ま、そのように、日本のおせち料理でも、その中身には、いろいろな意味や願いが込められているのだそうです。

それと少し似ていると言って良いかどうか分かりませんが、過越のメニューにも1つ1つ意味があります。まず、1番大切なのは子羊です。先程見た出エジプト記のみことばに、その時にほふられる羊は、傷の無い1歳のオスの羊でなければならぬ！とありました。また、この羊は、生で食べたり、水で煮たりすることは禁じられており…、それを翌朝まで残しておくことは、厳しく禁じられておりました。皆さんもご存知のように、この子羊は、あのイエス様のことを指し示しています。イエス様こそ、神が私たちのために備えてくださった、罪の無い…、完全な神の小羊であられたのです！

それ以外には、先週にも言いましたように、「種を入れないパン」つまり、イーストを入れないパンです。これは、あの出エジプトの時、イスラエルの民たちがゆっくりパンを焼く時間も無く、エジプトを出ていった時のことを思い起こさせるためです(出エジプト記 12:33-34)。それと、新約聖書を見た時、パン種は、良い例え(マタイ 13:33)にも悪い例えにも使われてありますが、よく私たちが目にするのは、パリサイ人たちの間違いや偽善が時々、パン種のように膨らんで、全体に悪い影響を及ぼすという意味で、イエス様から注意&警告されています。

それ以外には、「マーロール」と言われる苦菜(にがな)であります。これは、かつて、イスラエルの民たちがエジプトで受けた苦難を表わしているようです。それ以外では、「ハローセト」と呼ばれる「果汁などで作られた、赤茶色のソース」が出てきます。これは、かつて、奴隷となっていたユダヤ人たちが、エジプトのために作られたレンガを表わしているのだそうです。

このように、過越のメニューには、それなりの“意味”がありました。…そういったことによって、天の神様は、イスラエルが、あのエジプトから救い出してくださいとお願いしたことを覚えるために、毎年、こういった過越の食事を食べなさい！守りなさい！ということをお命じられたのです。

そうして、この時も、弟子たちは、過越の食事をみことばに沿って食べることができました。実は、この食事こそが、あの有名な「最後の晩餐」であります。そのことについては、次のポイントで、もう1度、触れていきたいと思います。

Ⅱ・弟子たちの「罪」や「弱さ」を自覚させる！（17-21 節）

どうぞ、もう1度、今日のみことばに戻っていただきまして、今度は、マルコ 14:17-21 をご覧くださいませ？そのみことばでは、イエス様が、あの12人の弟子たちに、彼らの「罪や弱さ」を自覚するよう導かれたように思われます。今日のみことばの 17-21 節には、このように記されています。

17 夕方になって、イエスは十二弟子といっしょにそこに来られた。

18 そして、みなが席に着いて、食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。

あなたがたのうちのひとりで、わたしといっしょに食事をしている者が、わたしを裏切ります。」

19 弟子たちは悲しくなって、「まさか私ではないでしょう」とかわるがわるイエスに言いだした。

20 イエスは言われた。「この十二人の中のひとりで、わたしといっしょに鉢に浸している者です。

21 確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわざいます。そういう人は生まれなかったほうがよかったです。」

●弟子たちの「困惑」と、私たちの「弱さ」！

さて、その木曜日の夕方、イエス様の一行は、先程見た2階の広間で過越の食事をされます。恐らく、その広間を所有していた主人は、イエス様のことを知っていたのではないかと、すんなりとその広間を、しかも、過越の日に貸してくれたのではないかと考えられます。実は、ここマルコ伝には記されてありませんが、今日のみことばの 17 節と 18 節の間には、ある大きな出来事がありました。…皆さんは、それが何か分かってくださいます？⇒それは、イエス様が弟子たち全員の足を洗ってくださったということです。実は、そのことは、ヨハネ伝にしか記されていないので、今日のところは省かせていただきます。

どうぞ、今日のみことばの 18 節をご覧ください。ここ、18 節には、『みなが席に着いて…』と訳されていますので、なんだか、イエス様と12人の弟子たちが、食事の用意された食卓の前にあるイスに腰かけられた“ような”シーンをイメージされる方が多いと思われる。

それは、私や皆さんが、今の文化で、つい「最後の晩餐」というものを想像してしまっているからです。それと、もう一つ、大きな理由として、あの有名な、レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた「最後の晩餐」という絵があまりに有名なので、私たちが知らず知らずの内に、その絵のイメージが刷り込まれてしまっているからです。実は、ここで「席に着く」と訳されてある言葉(ἀνάκειμαι)は、私たちがついイメージしてしまう「イスに座る」というようなイメージの言葉では「なくて」…、ギリシャ語の「上に」という前置詞＋「横たわる」という動詞とが合わさってできた合成語が使われています。

…と言いますのは、この当時は、食事を並べたテーブルを中心に、皆が左ひじを下にして、床に寝そべるような姿勢で、皆が食事をしていた、ということが分かっているからです。すみません。本当は、そういった写真を、ここで皆さんに見てもらいたかったのですが、なかなか、ネット上でも見つけることができなかったの、少し違うのですが、映画「ベン・ハー」の1シーンを写真に撮っておきました。それと、もっと、この時代の食事風景に近いと思われるのが、このイメージです。ちょっと、画像が悪いのですが、分かっていたかもしれませんでしょうか？

さて、この時、イエス様が大変ショッキングなおっしゃいます。それは、18節にあるように、『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとり、わたしといっしょに食事をしている者が、わたしを裏切ります。』という言葉でした。…皆さんも、ご存知のように、イエス様とその12人の弟子たちは、3年以上に渡って、寝食を共にしておりました。その弟子たちは皆、イエス様からたくさんのお話を教わり…、また、イエス様がなさった、様々な奇蹟や数多くの癒しなどを見てきたはずですが、…なのに、「この中の誰かが、わたしのことを裏切る！」とイエス様はおっしゃるわけです。

当時の弟子たちは、どれほど、驚いたことでしょうか？…だから、どうぞ、19節をご覧ください。そこには、『弟子たちは悲しくなって、「まさか私ではないでしょう」とかわるがわるイエスに言いました。』とあります。皆さん、分かってくださいませ？

弟子たちは言わなかったのです、「ああ、イエス様、それはアイツでしょう！」って…。と言いますのは、この時点では、誰も、誰が裏切るのか予見できていなかったからです。だから、弟子たちは皆、口々に、『まさか、私ではないでしょう？』というような不安を口にしていたわけです。

でも、皆さん、考えてみてくださいませ？…この時、イエス様は、結局、弟子のヨハネ以外には、誰が裏切るかをおっしゃられなかったわけでは？…だったら、どうして、イエス様は、こんなことを口にされたのでしょうか？

恐らく、それは、弟子たちのプライドやおごり…、まあ言えば、彼らの過信を打ち砕くためだったのではないかと私は考えています。…と言いますのは、実は、今日のみことばの平行記事であるルカ伝 22章には、こんなみことばも記されてあるのです。『21 しかし、見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓にあります。22 人の子は、定められたとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわざいます。』23 そこで弟子たちは、そんなことをしようとしている者は、いったいこの中のだれなのかと、互いに議論をし始めた。24 また、彼らの間には、この中でだれが一番偉いだろうかという議論も起こった。』(ルカ 22:21-24)

皆さん、聞いてくださいましたか？…ちょっと、私自身もうまくイメージしにくいのですが、この時、弟子たちは、イエス様がおっしゃった「この中の誰かが、わたしのことを裏切ります」ということを予告された…、その同じ食卓の場で、「一体誰が、この中で一番偉いだろうか？」なんていう議論が起こったというのです。…皆さん、信じられますか？…一体、どこでどう、話がこじれたら、「誰が一番偉いのか？」なんていう話になるのでしょうか？…でも、この期に及んで、弟子たちは、まだ、そういったことを考えていたのです。でも、だからです！…だから、イエス様は、彼ら弟子たちが如何に愚かで…、如何に、自分たちが頼りないか？自分たちがどれほど罪深く…、弱い存在であるかを、この時に伝えたかったのではないのでしょうか？

実際、来週、私たちが学んでいくみことばの中には、あのペテロを筆頭に、イスカリオテを除く11人の弟子たち全員が、「たとえ、イエス様と一緒に死ななければならぬとしても、私たちはイエス様を知らないなどとは申しません！」と言ったにも関わらず、そのすぐ後で、弟子たちは皆、イエス様のことを見捨てて逃げ出してしまったわけです。…そのように、弟子たちは…、いえ、私たち人間は皆、弱い存在に、虚勢を張ってしまう弱い存在なのです…。

●イスカリオテの裏切り！

さて、どうか、今日のみことばの最後 20-21 節をご覧ください。ここで、イエス様は、弟子のイスカリオテが、自分を“裏切る”ということをおっしゃっておられます。正直、今日のみことばには、イスカリオテの名前は挙がっておりませんが、平行記事のマタイ伝やヨハネ伝を見ても、はっきりと書かれています。

ちょっと、今日は、できたら、いつもより詳しく、この時の状況を確認していきましょう。今日のみことばの平行記事であるヨハネ 13 章には、このように記されています。『21 イエスは、これらのことを話されたとき、霊の激動を感じ、あかしして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります。」22 弟子たちは、だれのことを言われたのか、わからずに当惑して、互いに顔を見合わせていた。23 弟子のひとりで、イエスが愛しておられた者が、イエスの右側で席に着いていた。24 そこで、シモン・ペテロが彼に合図をして言った。「だれのことを言っておられるのか、知らせなさい。」25 その弟子は、イエスの右側で席に着いたまま、イエスに言った。「主よ。それはだれですか。」26 イエスは答えられた。「それはわたしがパン切れを浸して与える者です。それからイエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリオテ・シモンの子ユダにお与えになった。27 彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼に入った。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」28 席に座っている者で、イエスが何のためにユダにそう言われたのか知っている者は、だれもなかった。』(ヨハネ 13:21-28)

⇒どうぞ、皆さん。先程お見せした、この当時の食事風景をイメージしてください。この当時、イエス様と弟子たちは、食卓を囲んで、寝転んだ姿勢で、食事をしたり、話をしていました。その時、イエス様の右側に居て、「イエス様の愛しておられた弟子」というのは使徒ヨハネのことです。そのヨハネに対して、ペテロが合図というか、手話のようなものでヨハネに命令？します。「誰のことを言っているのか、教えてよ」って…。だから、ヨハネは、イエス様にこう尋ねたのです、「主よ。それは誰ですか？」って…。すると、イエス様は、こう返してくださいました、「それはわたしはパン切れを浸して与える者です」って…。そして、イエス様は、パン切れを取って、恐らく、一番最初に、イスカリオテにお渡しになったのです。…そういったことから、イエス様の右側には使徒ヨハネ…、反対側の左側にはイスカリオテが居たであろうということが分かります。

正直、このみことばだけを読んでみると…、まるで、弟子たち全員がイスカリオテの裏切りを知ったように思われるかも知れませんが、そうではありません。…と言いますのは、この 28 節にあるように、ヨハネ以外の弟子たちは皆、イスカリオテの裏切りを知らなかったわけであらう、そういったことから、イエス様とヨハネとの会話は、2人だけにしか分からないような“小声での会話”だったことが分かります。

でも、どうしてイエス様は、この時、イスカリオテの裏切りを弟子たち全員に知らせなかったのでしょうか？恐らく、その理由は、こうです。もしも、イエス様が、この時、イスカリオテが裏切るということを明らかにしたら、弟子たち全員は、イスカリオテが出ていくことを必死に引き留めたことでしょうか。…でも、そういったことは、神様のみみこころではありませんでした。…でしょ！神様のみみこころは、「イスカリオテの選んだように…、彼の好きなようにやらせてあげなさい」というようなものであったのです。その後、イスカリオテが激しく後悔して、イエス様のことを売った銀貨 30 枚を使うことなく、自ら死を選んだことは、先週にも学びました。

でも、イエス様がこの時、イスカリオテにした行為について、ルカは、その福音書にこう記しています…。さっき引用した 24 節も、もう1度読ませていただきますね。ルカ 22:24-27、『24 また、彼らの間には、この中でだれが一番偉いだろうかという論議も起こった。25 すると、イエスは彼らに言われた。「異邦人の王たちは人々を支配し、また人々の上に権威を持つ者は守護者と呼ばれています。26 だが、あなたがたは、それではいけません。あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者ようになりなさい。また、治める人は仕える人のようでありなさい。27 食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょう。むしろ、食卓に着く人でしょう。しかしわたしは、あなたがたのうちであって給仕する者のようにしています。』って…。

⇒皆さん、分かってくださいますか？先程も言いましたように、この時、弟子たちの中で、どういったわけか、「この中で誰が一番偉いだろうか？」なんていう、くだらない論議が起こったので…、だから、イエス様は、「そうではいけません！」という話と、「わたしのよう、給仕する者…、仕える者になりなさい！」ということをお教え、また、そういったことを実践してくださったのです。

だからね、皆さん…。イエス様が、この時、イスカリオテにパンを渡されたというのは、裏切り者が誰であるかをヨハネに教えるための、単なるサインでは無かったです。それは、まるで、給仕する者が、まるで、ご主人様に対してするような「愛の行為」であったのです。…だから、イエス様は、この食事の前には、弟子たちの足を洗ってくださったのです！…本来、イエス様は、弟子たちにとって師匠であり、また、救い主であられたわけで、本当なら、そのような構図は全く正反対でした。…にも関わらず、イエス様は、弟子たちの足を洗い…、イスカリオテにパンを渡すなどをして…、自ら、仕える者の姿を弟子たちに見せてくださったのです。

しかし、そういったイエス様に対して、弟子のイスカリオテが取った選択を見てみましょう！…実は、今日の平行記事であるマタイ 26 章を見てみると、弟子たちの裏切りを伝えた後の、イスカリオテの放った、こんな言葉が記されています。マタイ 26:25、『すると、イエスを裏切ろうとしていたユダが答えて言った。「先生。まさか私のことではないでしょう。」イエスは彼に、「いや、そうだ」と言われた。』

⇒皆さん、気付いてくださいますか？…この時、イスカリオテ以外の弟子たちは皆、イエス様に対して、『主よ』という言葉(κύριος)を使っています。…でも、どういうわけか、イスカリオテだけは、その『主よ』という言葉を使わずに、イエス様に対して、『先生』という言葉(ράββί = ユダヤ教の教師を指す「ラビ」)を使っているのです。…間違いなく、この時、イスカリオテは、イエス様のことを、真の神…、私の救い主として認めていなかったはずなんです。だから、彼はイエス様のことを売ることができたのです…。

今日のみことばの最後 21 節で、イエス様は、イスカリオテのことを指して、「そのような人間は災いだ！そういう者は生まれなかった方が良かった…」ということをおっしゃいます。…かなり、厳しい言葉ですが、でも、その通りじゃないでしょうか？…先週学んだように、この後、イスカリオテは、罪の無いイエス様のことを売ったことを激しく後悔して、首を吊って、自殺してしまいます…。

< 励ましの言葉 >

しかし、私は思っています。恐らく、このイスカリオテは、自分が生まれてきたことさえ、激しく、後悔しているのではないのでしょうか？…ルカ 16 章で教えられているような、あの金持ちのように…。私はこう考えています。Ⅱコリント 5:10 に、『なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。』と教えられています。また、Ⅰコリント 3 章のみことばでは、「ある人が建てた建物は焼けてしまっても、その人自身は、火の中をくぐるようにして助かる…」ということが教えられています。同じように救われた者たちが戴く救いのものに何の違いが無かったとしても、その時にいただく評価やご褒美には大きな違いがあることを、聖書のみことばは教えてくれています。

じゃあ、それなら、同じように…、救われなかった者たちが受けるはずの裁きも、例えば、あのサタンが受けるような裁きと、例えば、ここ日本で福音が伝わる前に救われなかった者たち…、ほとんど、福音のメッセージを聞くことなく死んでいった者たちが受ける裁きとは、全く同じではないのではないのでしょうか？

まあ、いずれにせよ、救われなかった者たちが受けるべき裁きは、正当なものではあっても悲惨です。…だって、彼らは皆、「火と硫黄とが燃える池の中で、昼も夜も、永遠に苦しみを受ける」(黙示録 20:10)わけでしょ？…正直、私には、人を救う力も、権限も、もちろんありません。私にできることは、ただ、このような神様のみことばを伝えることと…、皆さんが救われるよう、祈ることだけです。

ヘブル 2:3 のみことばは、こう教えます、『私たちがこんなによばらしい救いをないがしろにした場合、どうしてのがれることができましょう。…』って…。どうか、今日、このメッセージを聞いてくださった皆さんは、あのイスカリオテが、最後の最後まで、イエス様の愛や悔い改めの勧めを拒んだようなことがありませんように…。

願わくは、今日、皆さんが、これまでの生き方や罪を悔い改めてくださって…、このイエス様のことを、真の神、あなたの救い主として信じ受け入れていただきたいと思えます。それ以外に、私や皆さんが救われる道はありません！どうか、この大切な選択を先延ばしにすることなく…、今日を、あなたの救いの日としていただきたく、心からお勧めいたします。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。